

ボランティア コーディネーターは

何を めざすか

ボランティア・市民活動は、これからの市民参画型社会に欠かせません。そのボランティア・市民活動を活性化するためのキーパーソンがボランティアコーディネーターです。

しかし、ボランティアコーディネーターについての一般的理解は、あまり広がっていないのが現状です。今回の特集は、日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)がまとめた「基本指針」をベースに、ボランティアコーディネーターの認知をどう上げるか、またボランティアコーディネーターに何が求められているのかを考えてみました。

～JVCA「ボランティアコーディネーター基本指針」を読む～

ボランティア・市民活動の広がり とボランティアコーディネーターの重要性

「ボランティア元年」と呼ばれた1995年から今年で10年目を数え、ボランティア・市民活動が社会の中で根付いてきた様子が数字の上からも明らかになっています。全国の社会福祉協議会で把握するボランティア活動者数は779万人を超え、1、地域の活動に参加している人は10%、今後参加したいという人は50パーセントを超える²という調査結果が出されています。

こうしたボランティア・市民活動の広がりを受けて、参加したい人に活動の場を結び付け、市民参加によるまちづくりを進めるVコーディネーターの役割が、これから一層求められてくるといえるでしょう。

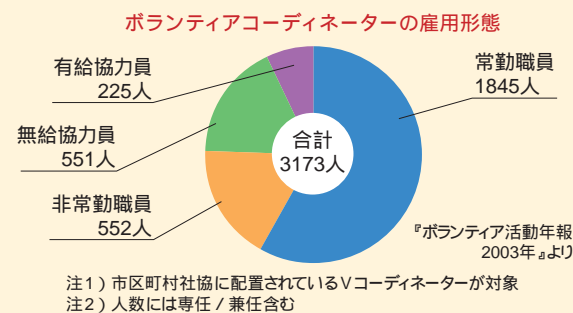
1: 『ボランティア活動年報2003』調査時点は2003年4月現在。
2: 『平成15年度国民生活選好度調査(内閣府)』調査時点は2003年11～12月。

ボランティアコーディネーターの 専門性の確立に向けて

全国社会福祉協議会では、Vコーディネーターを専門職として明確に位置付け、その役割を果たすための知識・技術の確立をめざすため、138.5時間のVコーディネーター新任研修プログラムを提案し、プログラムに基づいたテキストを開発しました³。

3: 『ボランティアコーディネータースキルアップシリーズ』全8巻
(ボランティアコーディネーター研修プログラム教材開発研究委員会編)

しかし、多様な分野・領域で活動しているVコーディネーターについて、その業務内容や役割などは関係者間でも共通理解が得られているとは言えず、雇用形態も様々な状況です。(図参照)



「ボランティアコーディネーター基本指針」について

様々な分野・領域にまたがるVコーディネーターを会員とする日本ボランティアコーディネーター協会(JVCA)では、このたび「ボランティアコーディネーター基本指針」を作成し公表しました。分野・領域に限定されない「Vコーディネーター」という専門職の基本的なあり方について、Vコーディネーター自身が議論を重ね明確にしたことは、その専門性の確立のための大きな一歩であると思われます。

ぜひ、仲間たちがつくりあげた基本指針を参考にして、これからの自分たちの業務やめざすべき社会のあり方について、議論を深めていただきたいと思います。

ボランティアコーディネーター基本指針(抜粋)

～ 追求する価値と果たすべき役割～

1 どのような社会をめざすのか

ボランティアコーディネーターは、なぜ人々に社会参加を呼びかけるのでしょうか。

なぜ、ボランティアや市民活動団体を支援するのでしょうか。また、組織やプロジェクトへのボランティアの参加をうながし、目標に向かってともに活動しようとするのでしょうか。それは、多くの人々の参加と行動によって実現していきたい社会像があるからです。

一人ひとりの「市民」が自らもつ力を発揮し合ってこそ実現できる社会、恒常的に改革をつづける社会、それを「市民社会」という言葉で言い表しても良いかもしれません。どのような社会をめざすのか。私たちがめざす「市民社会」の要素を表します。

- 一人ひとりの自由な意見、自分らしい生き方が尊重される社会
- 一人ひとりが自分の力を生かせる社会
- 一人ひとりの「弱さ」を分かち合える社会
- 一人ひとりが役割を持ち対等な関係で働ける社会
- 多様な文化を認め合えるグローバルな社会
- 人々が協同(協働)して社会課題の解決に取り組む社会
- 人々が自由に社会づくりに参画できる社会
- 結果のみでなく、決めるプロセスを大切にする社会
- 効率のみを優先させるのではなく、豊かな人間関係を創り出す社会
- 自然環境を守り、命を受け継ぐことのできる持続可能な社会

2 どのようにボランティアをとらえるのか

ボランティアコーディネーターにとって何より重要なことは、ボランティアおよびボランティア活動の本質をどのように理解するかということです。

ボランティア活動は、一般的に「自発性」「連帯性」「無償性」という言葉で説明されますが、コーディネーターがボランティア活動をどのようにとらえているのかは、日常のコーディネーションのあり方と質を左右する重要な要素です。

ボランティアに対する私たちの認識を具体的に表現します。

- ボランティアは「市民社会」を構築する重要な担い手である
- ボランティアは自分の意志で始める
- ボランティアは自分の関心のある活動を自由に選べる
- ボランティアは活動に対して責任を持ちその役割を果たす
- ボランティアは共感を活動のエネルギーにする
- ボランティアは金銭によらないやりがいと成果を求める
- ボランティアは活動を通して自らの新たな可能性を見いだす
- ボランティアは活動を通して異なる社会の文化を理解する
- ボランティアは活動に新しい視点や提案を示し行動する
- ボランティアは安価な労働力ではなく、無限の創造力である

全文は日本ボランティアコーディネーター協会のホームページでご覧いただけます。

⇒ <http://www.jvca2001.org/index.html>

3 どのようにボランティアに向き合うのか

ボランティアコーディネーターは、ボランティアや活動を希望する人たちを、いかに支援し、協働することが必要なのでしょうか。どのようなスタンスでボランティアと向き合い、かかわりをもつべきなのでしょうか。ボランティアコーディネーターがボランティアと向き合う基本を具体的に表します。

- ボランティアの意志を確認し、希望を尊重する
- ボランティア一人ひとりの経験や関心、活動動機を尊重する
- ボランティア一人ひとりのなかにある力や可能性を信じる
- ボランティアに共感する気持ちを大切に
- ボランティアの多様な意見や考え方を受容し、活かす姿勢を持つ
- ボランティアとコーディネーターは対等であるという自覚を持つ
- ボランティアとコーディネーターの役割の違いを認識する
- 豊富な情報、社会資源のネットワークを用意しておく
- ボランティアが新たな課題や活動に挑戦することを応援する
- ボランティアと課題を共有し、ともに考える姿勢を持つ

4 どのようなボランティアコーディネーションを行うのか

ボランティアコーディネーションとは、どのような視点をもって、どのようなことが行われるべきなのでしょうか。

ボランティアコーディネーターの役割と専門性について理解いただくために、ボランティアコーディネーションとは何かを具体的に表します。

- ボランティアが活動を通して、「市民」として成熟していくプロセスを大切に、それを支える
- ボランティアの動機やニーズ、得意分野などをていねいに聴き、活動の選択に役立つ情報や資源を提供する
- ボランティアコーディネーター自身がビジョンや社会観を持ち、ボランティアや関係者に対してわかりやすく発信する
- 人と人、人と組織を対等につなぎ、一方的な人間関係や上下関係などが生じないように調整をはかる
- ボランティアの力が活かされるような環境をつくり、活動への意欲が高まるような工夫をする
- 個々の活動、それぞれの団体の発展にとどまらず、他者と協同(協働)する意義に着目し、ネットワークづくりを推進する
- ボランティア同士が問題意識を共有する場をつくり、双方向の議論によって互いが学び、あらたな課題の発見につなげる
- ボランティアを社会づくりや組織活動・運営の重要な構成員として認識し、活動の企画や実施、評価に参加できるしくみをつくる
- ボランティアの問題提起や提案を広く受けとめ、解決に向けてともに活動(プログラム)を開発する
- 困難な課題を社会に開き、多様な人々が出会い、話し合う場をつくることによって、より良い社会の創造に向かう

多分野の人々と議論してつくりあげた「基本指針」

ボランティアコーディネーターを
こう考える

特定非営利活動法人
日本ボランティアコーディネーター協会代表理事
龍谷大学社会学部教授
筒井のり子氏

今回の特集でご紹介した「ボランティアコーディネーター基本指針」は、ボランティアコーディネーターの社会的認知を深め、その役割を確立するための第一歩として示されたものです。この基本指針はどのような背景のもとに、どのような論議を経てつくられたのでしょうか。日本ボランティアコーディネーター協会代表理事の筒井のり子さんにお話を伺いました。

1 「基本指針」作成の背景

Vコーディネーターが専門性のある仕事であり、これからの市民社会の形成に不可欠な役割であることを広く訴えることを目的に、2001年、日本ボランティアコーディネーター協会を設立した。

「ボランティア」も「コーディネーター」も、なじみのある言葉であるために勝手に解釈され、Vコーディネーターという言葉が独り歩きしている現状がある。組織の中でもVコーディネーターの位置づけがあいまいになり、専門性の要る役割であることが仲間や上司に理解されにくくなっている。

ならば、ボランティアコーディネーションにはこれだけは欠かせない、視点・知識・技能を明らかにしていく必要があるとの意見が会員から出され、基本指針を作成する動機となった。

2 「基本指針」のめざすもの

社会に向けた発信とVコーディネーターに向けた発信の2つの目的がある。

まず社会に対しては、市民が主体的に参加していく社会を形成するにあたって、Vコーディネーターが非常に大事な役割を担っているとアピールすることである。言うだけでは伝わらないので、「基本指針」として明文化したものを示し、その周知を図ることをめざしたい。

Vコーディネーターに対しては、自分が何をめざし、どこに基盤をおいて業務を遂行するか、ということを確認するときに、「基本指針」をよりどころにできたらよいと考えている。

3 「基本指針」の構成について

「基本指針」の検討にあたり、まず多様な分野でVコーディネーションに携わっている方々に集まってもらった。環境、国際交流・協力、教育、福祉と様々な分野のメンバー15人くらいで、「ボランティアコーディネーションにおいて何が大切か」ということについて自由に意見を申しあげた。

その意見交換から、前提として「めざすべき社会がどのような社会か」を共通認識としてもつ必要があるということになった。例えば「市民社会」という言葉はよく使われるが、市民社会の中身を具体的に言葉にして表現することが必要なのではないかとということである。

ボランティアの捉え方についても同じことが言える。一般的なボランティア像と私たちが考えているボランティア像は必ずしも一致しないかもしれない。Vコーディネーターとしては、ボランティアをこう捉えたいと表現する必要にも迫られた。

さらに、具体的にボランティアとどう向き合うのかということもおさえなければならない。また、ボランティアコーディネーションというのは単なる需給調整ではないことを、もっと具体的に表現しておくべきだということも話し合った。

結果として、「基本指針」の副題にもあるように、前段の2つがVコーディネーターとして「追求する価値」の部分、後段の2つが「果たすべき役割」の部分として構成することになった。

4 多分野に共通するスタンダードづくり

これまでボランティアということを考える時、概念的にも福祉分野に重心がおかれがちだった。検討メンバーも福祉分野が多かったため、違う分野から見ると当然入っている言葉がないということもあった。例えば国際交流の分野では「多文化」や「共生」、環境の分野では「持続可能な」などの言葉が必要だろうとの指摘を受けた。逆に福祉分野の「弱さを分かち合える社会」などの言葉に、他の分野の人ば「なるほど」と気付かされたようである。

その意味では、つくっていく過程そのものが学習の場となったといえる。他の分野の人にも共通して理解してもらうためには、これまでの自分たちの言葉だけでは的確に伝わらないこともわかった。こうして、多様な経験と価値観をもつ人たちとの議論の中で、多分野に共通したボランティアに関するスタンダードをつくり上げていくことは非常に貴重なプロセスであった。

Vコーディネーションの捉え方にも立場・組織によりかなりの差を感じた。例えば、ボランティアが参加している組織の場合は、ボランティアにいかにか育ってもらうかを教育的に考えがちだし、一方では人材育成よりも組織や事業の目標達成を重視するべきだという意見が出るなど、かなり違いが現れた。これらの差異を「基本指針」の中に、いかにバランスよく盛り込むかも苦労した点である。

本来は組織の中でも立場が違えば、意見も異なる。さらに分野が違うと使う言葉から違ってくる。一つ一つの項目について、違う分野の人ときちんと議論して、納得する形で協議を重ねる中で、意見の違いをすり合わせ、多分野に共通するスタンダードをまとめることができたと思う。

5 ボランティアコーディネーターに望むこと

Vコーディネーターは重要だと言いつけてきたが、今改めてその重要性が増していると思われる。なぜなら、あらゆる局面でコミュニティが重視されてきているからだ。自治会活動など、一見Vコーディネーターと関係ないように思えても、地域に住む多様な人々がいかにつながっているかが大きな課題となっている。声の大きい人だけでなく、いろいろな人が参加できる社会づくりが求められており、その基本はコーディネーションである。

さらに社会のいろいろな面で今、官から民へ移行がなされている。その背景には財政的理由があるが、市民参画をもっと積極的な位置づけにするために、Vコーディネーターの役割は重要だと思う。センターの中だけでなく、もっと広く社会の中で役割を担っていくことが大事だろう。

現場でがんばっているVコーディネーターは悩みも大きいだろうが、そんな時はこの「基本指針」に立ち返り、めざすものに向かっていってもらいたい。

日本ボランティアコーディネーター協会は、ボランティアコーディネーターの専門的役割の確立をめざす組織として設立された特定非営利活動法人です。ボランティアコーディネーターのネットワークを確立し、社会的認知を進めています。

→ <http://www.jvca2001.org/index.html>